

のでありますから、斯る生理的の練習を行つたの

みでは固より言語の練習を全うし得らるゝものでは
ありません、打つといふ動詞は打つ身振りによ
り、泣くといふ動詞は泣く真似によつて教へると
云ふやうに成るべく具體的方法を用ゐて言語を
習得せしめるのであります。白痴の教育に於ては
智的教育といつても以上の程度に止らざるを得な
いのであります。セガンは尙その上に白痴をし
て幾分なりとも社會のために役に立つ人とならし
めたいといふ希望から、生活を支配してゆくため
に重要缺くべからざる所の記憶と想像とを興へや

うとして居ります。

斯くてセガンは白痴教育の土臺を築いたのであ
ります。セガンの著書としては前にも一寸申しま
した

『白痴及び缺陷兒の倫理的取扱、衛生及び教育』
(一八四六年出版)及び千八百六十六年に初版を發
行し、千九百七年に再版を發行した。

『白痴及び生理的方法に依る其の取扱方』
以上の二部が有名であります。尙この他にも千八
百四十七年のチェンバース・ジャーナルにも彼の
論文が三篇程掲載されて居ります。

小説 夏子 (つらき)

六

それから後、夏子は度々病院を見舞つた。芳枝
が、誰れよりも自分の見舞を喜ぶといふことを聞

若葉

いたからでもあるが、實際芳枝の容態が氣にかゝ
つてならなかつた。それから又一つには、芳枝の
お母さまが妙に夏子をひきつけた。あの脊のすら

りつとした、上品な、しかも一點の氣品ぶつた處のない淑かな姿、色の白い顔が看病にやつれて、どこことなく蒼味を帯びて居るが、それでも話をして居ると頬の邊にうすく紅をさして來る和かな表情。それ等は夏子を親ませずには居なかつた。夫人の方でも夏子の見舞をよろこんで、いろ／＼と氣安く話をした。斯ういふ場合によく出勝ちな愚痴つばい言葉などは、たゞの一度たりとも漏らされたことはないが、時によると其のやさしい目の底に、かすかに涙を見るようなことは間々あつた。そして、そういふ時には夏子の方が餘り眞面目な顔つきになつて仕舞ふので、いつでも夫人の方から、巧みに其の場の感じを和らげた。此の眞實で居てしかも決して迫つて來ない態度が、夏子をして言ふにいはれぬなつかしさを感させた。けれども何よりも夏子を深く感させたのは、芳枝さんに對する其の態度であつた。二人の看護婦と女中とが、まめに働いて、夫人は別段何をする

といふこともなかつたが、日夜に病室を離れなかつた。そして、芳枝さんには、いふ迄もなく誰れよりも必要な看護者であつた。

入院後十日ばかりたつた頃は、芳枝の病狀は甚だ危険な位ゐの狀態になつて居た。そしてカンフルや食鹽水の注射が幾日も續いた。平生聞き分けのよい芳枝も、注射の苦痛だけには殆んど絶泣して身を悶へた。流石の醫師も氣兼ねしい／＼其の必要を一回毎に辯解でもする様に説明したりした。そういふ時の夫人の態度はいつも立派なものであつたそうである。

或る日夏子が見舞つた時、丁度注射が濟んだ處であつた。そして、芳枝さんは横むきになつて睡つて居た。夏子はすぐ歸ろうとしたが、夫人がとめるので靜かに椅子に腰をおろして、芳枝さんの寝顔を見た。夫人も傍に椅子をもつて來て腰をかけた。二人とも黙つたきりである。丁度看護婦達は用があつて外へ出て、病室内は物音もなく靜か

であつた。芳枝さんのかすかな寢息きだけが聞える。注射に泣きつかれて、其のまゝ泣き寢入り眠つて仕舞つた芳枝さんの既は、まだ涙にぬれたまゝになつて居る。血の氣の少なくなつた小さい唇が、それでも健康の時と同じようにきちんと結ばれて居る。夏子はぢつと黙つて見て居たが、白い毛布の下から一寸出て居る、其の瘦せ細つた手を見た時に、もうたまらなくなつて仕舞つた。夫人は、そうと立つて窓の處へ行つて、重たいカーテンを音のしない様に、そつとひいた。夏子も殆んど無意識に椅子を離れて、其の窓の側へ行つて夫人と並んで立つた。窓へは直接には日はさして居ないけれども、外には五月の青い日光が並木のように植えられて居る楓の茂りの間に流れて居た。二人は矢張り黙つたきりである。やがて夫人は靜かな聲で言つた。

『外はお暑う御坐いませう』

『急にお暑くなりまして』

『幼稚園のお子さん方は皆さん……』

『こんなな氣候が急に變りますと、加減の悪くなるお子さんがよくありまして、お休みが澤山ありますので困ります。』

『子供の病氣程つらいことは御坐いませぬ』

『奥さんもお疲れで御坐いませうね。』

『私で御坐いませんと、芳枝が承知いたしませんもので御坐いますから』

『左様で御坐いませうつて』

口では斯ういつた丈けであつたが、夏子の心には、可なり強い感じを以て、夫人の今の言葉を聞いた。『芳枝の爲には自分でなくてはならない』といふ言葉、こんな力強い言葉が、母の口からでなくて何處から出よう。いろんなことを考へ過ぎて鈍つて居る夏子の頭には、斯ういふ力の言葉でなくては感じない。理屈じやない。思想じやない。

格言でもない。事實だ。人の心の事實だ。事實から出て事實を語る言葉には眞實の力がある。夫人

の淑しい物の言ひ方には、表には何の主張もあらはれて居ないが、裏を解いて見れば、『芳枝の病氣は私が居なくては癒らない』といふ、強い自信が籠つて居る。之れを親心のあたりまへとして見て仕舞へば、それ迄のことであるが、此の親心そのものは何といふ偉大な力なのであらう。

夏子は親心といふことに就て今始めて知つた譯ではない。しかし、此の場合、此の人の口から此の言葉を聞いて、一種の感にたえなくなつたのである。

夫人と夏子とは再び静かに寢臺の側へ來た。芳枝はさつきからよく熟睡して居る。

七

今日は講習の日である。夏子は元來知識慾の可なり強い方であつた。出席することの出来る講習會へは大低缺かさずに出た。又幼稚園で購入する教育書類などは、いつも夏子が第一に借りて歸つて讀んだ。人間の知識慾は加速度で進むものであ

る。斯うして知識に近づいてゆけばゆく程、夏子は知識の興味を増した。興味を増すと共に頭も進んだ。そして明瞭さと細緻さとに於て知識に對する要求の程度が次第に高くなつた。おとなしい夏子は、人の前に自分の知識を語るようなことは決して無かつたけれども、それでも其の學問すきは同僚の間にも認められ、尊敬もされて居た。自分でも學問すきの方だと思つて居た。

然るに、此頃になつて、知識に對する夏子の興味の具合が餘程變つて來た。學問の尊嚴を失ひはしない。知識の必要を忘ればしない。殊に自分の無知に關する感じは、少したりとも鈍つたのではない。たゞ何だか知ら物足りなくなつた。分らないではない。面白くないではない。殊に知識の中に自分を樂しませて居る時の快感は、決して變らない。しかも、知識の中から一步外へ立つて、其の知識なるものを顧みると、否寧ろもつと嚴密にいへば、其の知識と自分との眞の關係を顧みると、

何だか嫌らない感じを禁じ得ないのである。本を讀んだ時でも、それを讀んで居る間は可なりの感興を以て其の知識の中に没頭し、又享樂する。それは以前と變りない。併し、愈々讀み終つて巻を

措いた時、以前は、讀了の快感、すなはち人及び自己に對する知識の得意といふ様なものを感じたものであつたが、此頃はそれがなくなつた。講習を聽いて居ても、講師の該博な材料、明晰な頭腦から流れ出る滑かな知識の流れに、丁度流れに游泳する魚の如く自分の頭を遊ばせて居る間の快感は前に劣らないが、さて、その快感の後には一種の形容し難い不快感がつゞいて起つた。それが講義の終つた後にも起るが、時には聽講中にもヒョイ／＼と起つて、充實して居ると思つて居る空氣の中を、時々眞空の風がすう／＼と吹き過ぎると言つた様の感がした。

自然、講習會などに對する夏子の狂熱的感興も前の様には起らないで、今日も、何だか進まない

様な氣がしつゝ、それでも『學問』に曳かれて矢張り出席したのであつた。

講義がいくぎりすんで、十分間の休憩になると、講師が壇を下りて控室へゆくのを待ち兼ねる様に、皆も廊下へ出た。四五日前から急に溫氣を増して來た今日の天候の爲もあるが、講義も一寸うっかりして居ては分り難い程度のものであつた爲に、皆は大分疲れたのである。

『遠山さん』

夏子は窓から空を見て居たが、不意に呼ばれて振りかへて見ると、講堂で丁度自分の後ろの席に居る或る私立幼稚園の年とつた保母であつた。

『あなたよく筆記してゐらした様ですが、一寸拜見させて下さいな。それから、あすこの處、それから、子供を自然科學的に客觀的とかに研究しなげりやいけないと仰せあつた、あすこの處お分りになりまして。私何だかよく分らなかつたのですが、教へて下さいな』

夏子は、自分の席へ行つて、筆記を持つて来て見せて、質疑の點を説明してやつて居ると、そこへ、懇意な若い保母が二人手をとりあふ様にして、何か話しながら、その前へ来たが

『大層御勉強ですのね。私睡むくつて／＼仕方ないのですもの。何にも分りはしません。いゝじやないの。どうせあんな六かしいことなんか。それよりか、今度の日曜に帝劇の活動へいらつしやらなくつて。私達今御相談してるんですが、あなたも一緒にいらつしやいましたな。新物でそれは／＼面白いんですつて。ねえ、いらつしやいな。』
と言つて誘ふ様のことを言つて、其癖返事も聞かないで、行つて仕舞つた。

『そうすると、つまり、子供を私達の考へや感じを離れて見なければいけないと言ふのですね。』
呑氣な若い保母の活動寫眞勧誘に口をつぐませられて居た老保母は、此時やつと口を開いた。

『まあ、そういふことなんでせう。私にもよくは

分りませんが』

『ほんとうに、そうですねえ。其の客觀的とかの見方をしないから、私達が子供を見間違へたり考へ違へたりするのですねえ。だから、つまり、客觀的にしなければいけないんですね。』

老保母は、つまり／＼を繰りかへしては、頻りに感心して居る。ところが、夏子には、そんなに感心する氣が起らない。のみならず、説明をして居る中に、自分には却つて分らないものになつて仕舞つた。講義の言葉の上では随分ハッキリして居ることの様には思はれて、まるつきり分らないではないが、それで居て、どこか腑に落ちない。その中に、鈴がなつて、次の時間が始まつた。

八

夏子が一日の勤務を終つて、家へ歸るのは大抵四時過ぎであつた。電車を降りてから家まで、人家のある町通りを來れば却つて近いのに、天氣の時は、少し廻り路ながらいつでも籬の多い淋しい

道の方を歩いて歸つた。

夏子は季節では五月が最も好きであつた。青葉もやゝ色の濃くなつた頃の、あの蒸すような、壓するような木々の下などを歩くことは、夏子にとつては、人が四月の花に浮かれるにも優つて愉快な一年中の行樂であつた。しかし何の彼のと妨げられて、ゆつくり此の樂みを味ひ得る年は、めつたになかつた。むかふに見える森を目あてに、草のしげる丘の小道を登つてゆくと、檜の木などの高い蔭に日を覆はれて、うす暗くなつて居る木下闇の叢に、ふと野茨の白い花でも見つけた時の胸のどよめきなどを空想しながら、斯うやつて此の道を廻つて歸るのが、せめてもの樂しみであつた。

今日は講習で、いつもよりも遅くなつた。近い道を早く歸らうかとも思つたが、今日は尙更いつもの好きな道が歩き度かつた。殊に、心をそゝのかす様な此頃のツワイライトは、いつもよりも却つて夏子の心を靜かな道の方へ誘つた。

若い者達の威勢よく騒いで居る大きな魚屋の店に添うて横町にはいると、急に世界がうす暗くなる。大きな石の門の立つて居る屋敷を離にそうて曲ると、だら／＼と坂道になつて、そのまゝにうね／＼と暫く暗い道がつゞく。夏子は焦茶の日傘を杖の様にして、歩いて居る中に、さつきからの問題がまた頭の中へ浮いて來た。……我れを離れて子供を見る。……純客觀的に子供を觀察する……どつちから考へを入れて解いて行つたらよいか分らない様な極めて不安な疑ひが夏子の頭を曇らせた。すると急に講習の先生の眞白なカラーが目に見えて來た。と思ふと、さつき廊下で此の問題を自分に質問して、つまり／＼を繰りかへして満足し感心して居た老保母の顔が目に見えて來た。……自分を離れて子供を見る……言葉の上では、はつきりして居ることの様だが、事實の上には、果してどういふことになるのだらうか。そんなことは、自分には出來そうもないし、何だ

か到底ありそうもないことの様な氣もする。先生のお話では之れが極く普通のことの様には言はれたが、それは先生が特別の學者だからかも知れない。私にはどうも分らない。……

あたりが急に明るくなつた。驚かされた様を目をあげると、いつの間にか又坂を上つて、丘の上へ來て居た。そして明るい殘照が、西から東へ空一面に流れて居るのであつた。夏子は歩いて居る中に、いつもの庭の廣い家の前へ來た。其の家は殆んど全部庭の様な打開けた屋敷で、垣根が極くまばらな低いものである爲、通りから其の美しい芝生の庭がよく見えた。奥の方に平屋建ての主屋につゞいて小さい瀟洒な洋館があつて、其の窓の外には一面に薔薇がからみついて居た。夏子はいつでもいゝ室だと思つた。

今日は其の洋館からピアノが漏れて居た。いつも此處を通る時は、もつと時間が早い故か、ついで聞えたことのないピアノの音が今日は珍らしく

漏れて居る。曲は何といふのか、夏子の知らないものであつた。何だか前に聞いたことのあるもの様の氣もするが思ひ出せない。たい如何にもやわらかい曲である。夏子は其の洋館を圍む薔薇の花の夕闇にはの白いのを見るときも見つめながら、やわらかい五月の夕暮の空氣に溶けてゆく、其のやわらかい音にちつと聽き入つた。そして、理屈でこぐらかつた頭の中が、滑かに溶けてゆく様な氣がした。

此時ふと夏子の頭に、芳枝さんのお母さまの、すらりつとした上品な姿が浮んで來た。それと同時に白いベッドの上の蒼白い芳枝さんの顔が見えて來た。……自分でなければならぬ。……自分でなければならぬ。……何といふ力の強い言葉であらう。それがあの姿のやさしい人の口から出たのである。何といふ力の強さであらう。此の力でこそ我子の病氣がなほるのだ。自分は――

夏子は籬の側を離れて識らずく、歩き出して居

た。——何事でも斯ういふ心持ちがあつてこそ、自分のして居ることに力がある。それでこそ、相手に充分に徹底し得る。自分身分に自分が始めて徹底して来る。之れだ。之れだ。之れが無くつて何の力あることが出来よう。私には之れがまるで無い。子供達をどうして喜ばせようかとは思ふどうして益しようかとは思ふ。どうしたら、どうしたら、とばかり考へて居て、自分が一人々々の子供の爲にどの位必要のものだといふことは、一度だつて思ひもしない。子供達は要求して居るのだ。私を要求して居るのだ。私からではない。私をだ。私からお、嘶を聞き度いばかりじやない。お嘶を私から聞きたがつて居るのだ。私と遊び度いのじやない。私と遊び度いのだ。それに私は何を與へて居る。——夏子は軽い興奮を覺えて、思はず強い歩を踏んだ。——私はたい勞して居る。何を與へようかと勞して居る。けれども、私自身が一人々々の子供達の爲になくてならないものとな

つては居ない。だから力はいらないのだ。張りがないのだ。工夫があつて力がない。勵精があつて力がない。之れでは保育は仕事だ、勤務だ。お役目だ。私は教育者の中の極く小さい一人に過ぎないが、我が幼兒達は私をそうは思つて居ない。彼等にとつては私丈けが先生だ。私は教育にたづさわるものではなくて、私が教育をする筈なのだ——

夏子は知らぬ間に自分の家の前へ来て居た。小さい門をはいつて格子戸をあけると、お母さんが出て來られて

『夏かい、大層おそかつたねえ』

と言はれた。

母の聲をき、母の顔を見て、夏子は理屈の子から、母の子に歸つた。

『只今、今日は講習がありました。』

『そうそ。講習の日だつたねえ。さつき先生からお葉書が來て居るよ』

夏子は、急いで自分の座敷へ行つて机の上に置いてあつた葉書をとりに上げて讀んだ。

『しばらくお出でがありませんが、お變りはありませんか。御母上もお障りありませんか。あなたの好きな五月ももうおきに終りますね。近い内に遊びにお出なさい。今年は薔薇が大層よく咲きました。』

* * * * *

夏子は其の夜、久しぶりで先生へ手紙を書いた先づ葉書の禮を述べ、近日に薔薇拜見に伺ひますといふ返事を述べ、更に筆を更めて、此頃來の心持ち、幾度か手紙を書きかけて書けなかつたことを詳しく書いて、『併し御安心下さいませ。私は保母を辭す様なことは致しません。何にも分りませんがもう一度新たに考へて見ます』と書き添へた。そして、之れでは、何だか立派なことを言ひ過ぎて居るような氣がしたが、先生だから何と書いたつて私の實際を見ぬいて下さる、と思つて其

まゝ封をした。(をわり)

第二十三回三市聯合保育會

大正五年五月二十一日大阪に於て第二十三回京坂神三市聯合大會を開催し得たりしことは、我が國保育事業の進歩發展に資するの深大なるを喜びます。茲に右大會の概要を述べます。

會場 北區堂島小學校

當日京坂神の約六百の保母方は何れも元氣よく會場へ集つた。やがて午前九時君が代の合唱で開會、大阪市保育會長の開會の辭大阪府知事の祝辭代讀。續いて『學校教育の基礎としての幼児保育』と題し奈良女高師教授野田義夫氏の講演あり。氏は幼稚園教育の價値より説き起し、國民道德の根本觀念は幼児期に教養せらるべきものなり。此大切な徳性の基礎は絶對無限の母の愛に依つて家庭にて培はれる。この尊き母の任務に代るべき保母は母の愛を以て其任務を發揮するに於て國家に重大なる功獻をなすものといふべきである。猶子供に生命たる遊戲に就ては幼児が遊戲に對する興味熱心努力はやがて成長後の職業の上に移さるべきもの。つまり職業の基礎を作る上に極めて必要と説き終られた。この間約一時間。次に大村女子師範學校長議長席につき今日の眼目たる各地提出の研究題に移る。

研究題一

園児心身發達の正常の標準を定め且其標準より超脱せる幼児の状態を承りたし